
墮ちる

seru

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

堕ちる

【Nコード】

N6449V

【作者名】

seru

【あらすじ】

、その為に。

レースの施された真っ白なブラウス、リボンのついた真っ黒なコルセット、そして、モノクロなギンガムチェックのフレアスカートを身に付け、私はニヒルに黒いハイヒールを鳴らし、街を歩くのだ。

――堕ちる、その為に。

◇ 1

「腐ってるわ」

その薄い唇が、はつきりと、きっぱりと紡ぐ。

「腐ってるのよ、世の中」

そう言って、彼女は嘲るように微笑んだ。長いストレートの黒髪を手で払い、私と目を合わせると、もう一度嗤った。

「貴女も私も腐ってる。世の中全部、腐ってるわ」
「何度も何度も、彼女は“腐ってる”と繰り返す。」

そこは彼女の部屋だった。真っ白な壁に白いフローリング、白い家具、何もかもが白い空間だった。その中で、彼女だけが黒かった。髪を留めるカチューシャ、身に纏うワンピース、タイツ、スリッパ、全てが黒。

「でも、だあれも腐ってることに気付いてない。もしくは気付いてない振りかしら？」

ふふっと彼女は嗤って、すっかり冷めきっているだろうコーヒーを口にした。ちなみに私の前にコーヒーは置かれていない。彼女は自分の分だけコーヒーを用意して、自分の前にだけコーヒーを置いて、それからしばらく口を付けずにいた。だから、冷めた。

「貴女、何か言わないの？ そのお口はお飾りなの？」

彼女はそう言って、私を蔑むように目を細めた。それでも私は黙っていた。喋る必要性を感じない。彼女の言葉を聞くだけで満足なのだ。彼女は只管に一人で喋るから、その声を聞く、それが私。

「貴女、着ているお洋服も白、髪を結ぶリボンも白。まるで、このお部屋の装飾品みたいね」

そこで、彼女は嗤った。そして皮肉な口調で言う。

「さしずめ“お人形”といったところかしら？」

じっと彼女は私を見つめる。そんなに、何かを喋って欲しいのだろうか。何かを言って欲しいのだろうか。私は彼女の声を聞くだけ

で充分なのに。

「……お人形なもの」

私がそう言うと、彼女はとても嬉しそうに笑った。嬉しそうに「莫迦じゃないの」と言った。

そう、私はお人形だ。彼女の部屋の装飾品だ。外を一人で歩いたり、彼女以外の誰かと勝手に喋ったりしない。でも、彼女のモノではないらしい、彼女の定義では。

どうしたら、私は貴女のモノだと認めて貰えるの？ 私が本物のお人形じゃないから貴女のモノじゃないの？ 人間だから、貴女のモノじゃないの？

「本当、莫迦じゃないの。私のモノにはならないくせに」

「貴女のモノに、になりたい」

「……違うのよ——やっぱ腐ってるのね」

彼女はまた、コーヒーを口にする。それから、ゆっくりと溜め息を吐く。

「どうしたら、貴女は私のモノになるのかしら？」

そうアンニユイに呟いた彼女は、もういない。

◇ 2

あの日、彼女は私を部屋から追い出した。彼女の家からも追い出された。

「暫く、出て行って」

真っ白な部屋の中、彼女は冷めた口調でそう言って、目を細めて私を睨んだ。何故、彼女がそんな顔を言うのか分からない、理解出来ない。

「だったら、私を放り出して」

貴女のお人形なんだから。そういう意味を込めて言った。すると、彼女は私の腕を引き、黙って玄関の扉を開けると、私を外へと追いつ出した。それから目を合わせることなく、ボタンと大きな音を立てて扉を閉める。私はその場に茫然と立ち尽くした。玄関扉を只管に見つめていた。

何時間、そこに立っていたのだろう。私は人形のように、ただただその場に立っていた。じっと扉を見つめていると、やがてその扉が開いた。開けたのは彼女だった。彼女と視線が絡み合う。彼女は髪を手で払うと「もう入っても良いわ」と言った。そして、そのまま私の横を通り過ぎ、どこかへと去ってしまった。

私は彼女の背中を見送ると部屋へと入った。彼女に動かされるわけではなく、勝手に動くのはかなり不本意だったが、私の本来いるべき場所は彼女の部屋だ。私は彼女のお人形なのだから。

部屋に入っすぐに、白いミニテーブルに置かれた封筒が目に入った。表には私の名前が書かれている。差出人の名前は無かったが、宛名の字を見て彼女の字だと分かった。彼女が私に宛てた手紙。どうして直接言わないのか、さっきすれ違った時にでも言えば良かったのに、と不思議に思いながら、私は封筒から手紙を取り出した。手紙に書かれた彼女の整った字をゆっくりと辿る。

『私のお人形さんだと言う貴女に、自由をあげる。私の物になりた
いと言った貴女に、自由をあげる。これは罰。貴女は私の者にはな
ってくれなかった。だから自由をあげる。自由を解かれないなら、
私に堕ちなさい』

何度もゆっくりと字を辿る。彼女の言葉を反芻し続けた。

――私に堕ちなさい。

堕ちる、堕ちる、堕ちる。彼女に堕ちる、貴女に堕ちる。嗚呼、私、
自由なんか欲しくない。彼女のモノになりたい。彼女の物になりた
い。嗚呼、嗚呼、嗚呼。私は彼女の物になりたい。彼女の物になる
には、彼女の者にならなければならないのだろうか。彼女の者にな
るとはどういうことだろうか。彼女に堕ちれば、彼女の者になれる
？ ならば、彼女に堕ちるとはどういうことだろうか。彼女に堕ち
る、堕ちる、堕ちる。嗚呼、嗚呼、分らない。分らないけれど、
彼女に堕ちるとは即ち彼女に染まるということではないだろうか？

嗚呼、嗚呼。

私は着ていた白いワンピースを引き裂いた。髪を結んでいた白い
リボンを解き、床へと無造作に落とす。彼女のクローゼットを開け、
彼女の黒いコルセットを取り出した。それから、ギンガムチェック
のフレアスカートが目に残る。彼女が昔、私に着せたがっていた
ものだ。それも取り出した。

貴女に堕ちる、その為に。

レースの施された真っ白なブラウス、リボンのついた真っ黒なコ
ルセット、そして、モノクロなギンガムチェックのフレアスカート
を身に付け、私はニヒルに黒いハイヒールを鳴らし、街を歩くのだ。

◇ 3

まず向かったのは公園だった。子どもが好きそうな遊具は殆どなく、ベンチばかりが置いてある、中央の大きな噴水がシンボルの公園。その噴水の周りにあるベンチの一つに腰掛け、足を投げ出し、空を仰いだ。夕刻の空は真っ赤に燃え、灰色がかった雲が何筋も伸びていた。ふと、彼女と初めて会ったのも夕方の公園であったことを思い出し、私はゆっくりと目を閉じた。

あの日、私は公園のベンチに座り、一日を過ごしていた。毎日毎日、生きているという事実が重く押し掛かり、息苦しくて、真綿で首を絞められるようにして、じわじわと世の中に殺されていくのだと思っていた。だから、私は物になりたかった。生き物ではなく、その辺に転がる石のような、無機質な、物。意思もなく、感情もない、生きてさえいない物が私の憧れ。公園のベンチでずっと過ごしていれば、いつか干からびて、無機質なミイラになれるのではないかとさえ思っていた。

そこへ彼女は突然現れたのだ。夕陽をバックに現れた黒い影は、まるで死に神のようにも思えたし、私の願いを叶える魔法使いのようにも思えた。彼女は、黒いブラウスにレースの施されたロングスカートを身に付け、ひらひらの黒い日傘を差していた。そして、私が座っていたベンチに腰掛け、しばらく私のことをじっと見つめると、不意に立ち上がり、そのまま去っていった。変な人だなあと思ったことをよく覚えている――もちろん、人のことを言えた義理ではないことも自覚している。

その日の夜、満月が真上に昇った頃、彼女は再び私の前に現れた。彼女は夕方見たときと同じ服装のまま、ただし、日傘は畳んで右手に持った状態で、私の前に立つと、じっと私を見下ろした。私は彼女をじっと見上げ、視線が絡み合うことに、どこか緊張感を覚えた。

「ねえ、世の中って腐ってると思わない？」

唐突に、彼女は私に問い掛けた。私はその抽象的な問いに、どう答えたら良いのか分からず、黙っていた——ああ、でも、世の中が腐っているのだとしたら、私のこの息苦しさは、そのせいなのだと
言えよう。

彼女は私をじっと見下ろしている。しばらくの沈黙の後、彼女のたおやかな手が私へと伸びてくるのを見て、私はビクリと体を震わせた。彼女の指は、ゆったりと私の頬を撫で、唇をなぞった。

「腐ってるのよ、私も貴女も、世界さえも。分かるでしょ？」

彼女は嗤う。私の隣に腰掛け、優雅に足を組む。それから、私の肩に体を摺り寄せるようにして、彼女は私を見つめた。顔と顔の距離が近い。それでも、私は彼女から目を逸らそうともせず、距離を離そうともしなかったのは、きつと、彼女の何かに魅せられていたからなのだろう。彼女の薄い唇は弧を描く。

「——ねえ、貴女。このままここで、朽ちるの？」

朽ちる？ その言葉が何を意味するのか考える前に、彼女はふわりと立ち上がった。それから、私を見下ろして嗤う。手に持っていた黒い日傘で、私の顎をなぞった。

「貴女の眼、すごく息苦しそう。それはね、腐ってるせいなのよ。だあれも世の中が腐っているなんて気付かないのに、貴女は気付いたの。すごいことだわ、素晴らしいわ、貴女。このまま、朽ちていくなんて、すごく勿体ない。ねえ、そう思わない？」

彼女は私の顎から日傘を離すと、今度は膝を、ベンチに座る私の腿の横へと乗せた。彼女の両手が、やんわりと私の頬を包む。コツンと額を合わせた。

「だから貴女、私のモノにならない？」

ハッと呼吸が止まる。時の流れさえ止まった気がした。その言葉に恍惚とする。魅力的、魅惑的。彼女はゆったりと口角を上げた。

「貴女の、物にしてくれるの？」

私がそう呟くと、彼女は嗤って手を差し出した。公園に吹く、夜の冷たい風の中、私は彼女の手を取った。

あの時に似た冷たい風が頬を撫ぜ、私は回想の海から引き揚げられた。ゆつくりと目を開けると映る、夜闇に染まりつつある公園。私はベンチから立ち上がると、フレアスカートを揺らしながら、彼女を真似た颯爽とした足取りで、公園を出て行った。

◇ 4

彼女が家を出て行っからの数日間、私は彼女の家と公園の往復を繰り返していた。朝起きて、公園へ向かい、そのまま夜までベンチで過ごし、家に戻って眠る。

けれど、これでは駄目なのだ。彼女との出会いを回顧するだけでは、彼女に堕ちることは出来ない。頭では分かっている、何の意味もないということ。でも、だからといって、どうしろと言うのだ。私は彼女のお人形なのだ。公園で、あの手を取ったあの瞬間から。一体、どうしたら良い。彼女に堕ちるとは、彼女に染まるとは、彼女の者になるとは、どうということなのだ。

◇ 5

真っ黒な彼女のコルセットを、いつもよりきつく締める。鏡に映る私の顔は、どうにも苦しげだった。伸ばしっぱなしの前髪が目には掛かって鬱陶しい。横分けにしてピンで留め、彼女の黒いリボンで髪を結う。真っ白い家具ばかりが並ぶ部屋で、黒いものを身に付けると、彼女になれたような、そんな気がしてくる——私は彼女のお人形なのに。所有物が所有者になるなんて、聞いたことがない。

いつものように玄関扉を開けて外に出る。生ぬるい風が頬を撫ぜる。ふと、今日は公園に行くのではなく、違うところに行こうと思ひ立つ。彼女と行ったことのあるどこか。足を踏み出せば、黒いハイヒールがカツンと無機質な音を立てた——なんてニヒル。

◇ 6

足の向くまま歩いて辿り着いたのは、彼女とよく来た洋服屋だった。レースやリボン、フリルのついた服が数多く取り揃えられている。この服屋に来る度に、彼女は黒い服を手に取り、私は白い服を手を取った。彼女はそれを見る度に、不愉快そうに眉を顰めて私を睨んだ。

ふと、モノクロのギンガムチェックのワンピースが目に残る。今、私が穿いているフレアスカートと同じ模様。このスカートもこの店で買ったものだ。いつも白い服を手取る私に、ある日彼女が「私との折衷案よ」と言って、押しつけてきた。そのとき以来、私に着られることも、彼女に着られることもなく、クローゼットに仕舞われたままだった。

店内をゆっくりと歩きながら、私は彼女と初めてこの店に来た日を思い出していた。

「このお店じゃないと、嫌なの」

ふふっと嗤いながら、彼女は言った。お洒落でも何でもないジャージを着た私の手を引く彼女は、黒いブラウスと黒いフレアスカートを着ていて、いつものように真っ黒だった。フリルのついた真っ黒いワンピースを私に当て「似合うわ」と嗤う。

「……私、あれが良い」

ふと目についた真っ白なワンピースを指差しながら私はそう言った。白いものが良かった。彼女の部屋に置かれたものは真っ白だったから、私も白くなって、彼女の部屋に置かれたかった。これできっと、私は彼女の物。

「嫌よ。貴女は私のモノになってくれるんでしょう？ そんな真っ白な服、ただのお人形になるだけだわ。私の部屋の装飾品にでもなるつもりなの？」

「私、貴女のものだから、白が良い」

「――そう」

彼女は不愉快極まりないという表情で、私を睨んだ。私はただ、彼女を見つめ返した。

白い服が良い。白で着飾って、彼女の部屋に置かれない。私は無機質な物となって、彼女の部屋の装飾品となって、そのまま果てたい。彼女の所有物として、朽ちていきたい。お人形で良い。お人形が良い。

「そうなのね。分かったわ、そういうことなのね」

彼女は酷く低い声でそう言うと、私が指差した白い服を乱暴に掴み、レジへと持っていくた。

結局、私はお人形のような人間だった。人間なのだ、物じゃない。だから私は、今も彼女の物になりたいと願い、堕ちたいと願い、彼女の姿を探す。彼女との日々の痕跡を辿る。

店内をゆっくりと三周して、何も買わずに店を出た。そのまま、いつものように公園へと向かう。彼女に堕ちるとは、なんなのだろう。そう悩みながら、何も得られずに私はまた家に戻るのだろう。

◇
7

彼女のいない部屋は真っ白だ。無機質の極みをいくような無機質さ。その中で、彼女だけが真っ黒だったのだ、どこか違う世界から堕ちてきた異質な理のように。汚い表現を使うならば、清潔な空間を這い回るゴキブリのよう——ああ、だからこそ、きっと彼女は私に声を掛けたのだ。今更気付いたなんて、愚かなのだ、きっと。彼女は何度もそう、警鐘を鳴らしていたのに。

彼女がいなくなってから私は、間違いなくお人形ではない。お人形に近い存在になっていたのに、今はまるで人間だ、お人形の片鱗もない。一人で外を出歩いて、ご飯を食べて、家へ帰る。私のお金はそろそろ無くなるだろう。元々そんなに持っていたわけではない、彼女は別だったようだが。

◇ 8

気が付くとカフェへと入っていた。このカフェは、彼女と何度か来たことのあるカフェだ。彼女の誕生日も、ここで過ごした――誕生日？ ああ、そうだ、彼女が最も大きく警鐘を鳴らしたのも、あの誕生日だったに違いない。

「誕生日って、どうしてケーキを食べるのかしら？」

彼女は目の前に置かれたチョコレートケーキをフォークで切りながら、心底不思議そうに言った。そして、切り分けたケーキの欠片を口に運ぶ。

「……誕生日」

私がそう呟くと、彼女は頷いた。「今日は私の誕生日なの」と、誕生日などどうでも良いことであるように、彼女はぶっきらぼうに言う。あまりに関心の無さそうな言い方をするので、私は思わず彼女を凝視した。

「何？」

そんな私の視線に気付いて、彼女はやや不機嫌に眉を顰めた。私は少しだけ間を置いてから「誕生日、おめでとう」と言う。すると、彼女は嗤いながら問うた。

「どうして？」

一体彼女は何を問うているのか私には分からず、首を傾げた。彼女はまたチョコレートケーキを口に運んでから「どうして、おめでとうなんて言うの？」と言った。

「……だって、誕生日でしょ？」

「誕生日は祝福されるような日じゃないわ」

彼女は妖艶に目を細める。フォークを皿の上に置いて、自由になった右手の指を皿の淵にゆっくりと這わせた。

「誕生日は懺悔する日よ。生まれてきて、資源を無駄に消費しながら

ら生きて、ごめんなさいって。私はまた一つ、生き長らえてしまったの。嗚呼、なんて絶望！」

私は、彼女の言っていることが理解出来ず、眉を寄せた。そんな私を気にする様子もなく、彼女は再びケーキを口に運び始めた。

「人がいるから世界は腐る。誕生日を祝福するなんて、可笑しいのよ」

「じゃあ、貴女は今、どうしてケーキを食べてるの？」

私が問うと、彼女は嗤った。皿に乗っていたケーキは、あと一口くらいしか残っていない。彼女はそのケーキの欠片にフォークを刺した。

「誕生日だからよ。貴女と初めて過ごす誕生日」

それは、お祝いをしているということにはならないのだろうか？ 私は疑問に思ったが口にはしなかった。彼女はケーキを食べ終えると、どこか嬉しそうに嗤う。

「私、誕生日をお祝いされたことないのよ。毎年懺悔してたの、生まれてきてごめんなさいって。どうして生まれてしまったのかしら……——ふふっ、でも可笑しいわね。貴女におめでとうと言われて嬉しかった。これじゃあ、まるで、誕生日をお祝いしてもらいたかったみたいね。矛盾だわ」

それから、彼女はそっと手を伸ばして、そのたおやかな指で私の唇をなぞった。嗤う。妖艶に、口端を上げて。

「きつと、貴女は私とおんなじだから。だから嬉しいんだわ」

「……私は、貴女の、物」

所有物は所有者と同じじゃない、そういう意味を込めて呟いた。すると彼女は一瞬、絶望したような、哀しそうな顔をした。そして、ずっと目を細める。冷たい空気が彼女の周囲に漂う。

「——そう、残念だわ」

何の感情も感じさせない声が、私の鼓膜を震わせた。残念という言葉が、ゆっくりと胃の中へ沈んでいくようだった。

◇ 9

今、私の目の前には、あのときの彼女が食べていたものと同じチョコレートケーキが置かれている。あのときの彼女と同じように、フォークで切る。そして、それを口に運ぼうとしたそのとき、目に飛び込んできたのは窓の外の黒い影。街中の孤高の黒。全身を黒い服で包み、颯爽とした足取りで街を進んでいく。それは正しく彼女。私が堕ちたいと願う彼女。待って……待って、待って——待って！ケーキを一口も食べることなく、私はカフェを飛び出した。

「待って！」

泣き叫ぶような声だった——叫んでいた。大声を出すことすら久しいというのに。そんな私の声に、彼女はふわりと振り向いた。そして酷く艶っぽく嗤う。久し振りに見た彼女の嗤い顔に、私は手を伸ばした。

「私を、置いて……っ」

行かないで！ 私がそう言う前に、彼女は人差し指を唇に当てた。静かにしなさい、と無言で伝えてくる。それから、彼女はそのままやかな手を私へと伸ばした。私は吸い寄せられるように彼女の手を取る。その瞬間、風を切るように走り始めた。

「貴女の顔、初めて会ったときより酷いわね。まるで腐った水に棲むお魚みたい」

ふふっ、と彼女は嗤う。彼女に引かれるまま、街を駆ける。頬を撫ぜる風は少しひんやりとしていて、流れる視界は留まることがない。

とあるオフィスビルの前まで来ると、彼女は足を止めることなく、けれどもスピードを緩め、そのビルへと入った。このビルには一度来たことがあるように思う。来た、と言うよりは、通り過ぎた、が正しい。外から眺めただけで、中に入ったことはない。このビルは“職場”だと彼女は言った。彼女の職場。ガラス張りで小奇麗な外

観。中也イメージ通り、気味の悪い清潔さが蔓延っている。ここは異質。息苦しい。私は思わず、彼女に引かれていない方の手で、口を押さえた。

「息苦しい？ 腐ってるのだから、苦しいわよね。私も、貴女も、ここも、この街も、世界さえ！ でも、ここは腐ってるのに気付かず、綺麗であらうとしてる。だから苦しいの」

金属の冷たいエレベーターのドアの前まで真っ直ぐと歩く。彼女はエレベーターに乗り込むと、最上階のボタンを押した。その横顔は、どこか嬉々としていて、何故か儚い。彼女はふと、私に視線を送ると、微笑んだ。

「そのスカート、やっぱり似合うわね。それから、そのコルセットも」

エレベーターのドアが開く。彼女はまた、私の手を引いて、颯爽と歩いた。それから、非常階段を昇っていくと、突然視界が開ける――屋上。鮮やかな青い空が近くて遠い。白い雲が眩しい。不意に、彼女の手が離れた。くると、彼女が振り向く。

「私のお人形さんだという貴女。自由はいいかだったかしら？」

「……もう、自由は終わり？」

自由なんて、いらない。私はモノでありたい。彼女の、モノ。彼女の、物。彼女の、者？ この息苦しい世界。彼女がいなくなってから、私はずっと彼女を求めている。

「そうね、もう終わりにしようかしら。だって貴女――堕ちるでしょ？」

彼女の指が、私の頬に触れる。ゆっくりと滑り、私の首から顎へと回る。彼女は自信たっぷり、艶やかに嗤った。

「貴女、もう私に堕ちるでしょ？」

もう一度、言う。自信満々な声音。そんな彼女の言葉に、私は小さくゆっくりと頷いた。

貴女に堕ちる。貴女を求める。貴女と居る。だから、私を貴女のモノにして。

彼女はゆったりと長い黒髪を手で払った。私は彼女をじっと見つめていた。不意に、彼女は屋上の手摺へと足を掛ける。ふわりと舞い上がるようにして、まるで何でもないことのように手摺の上に立ち、私の方へと振り向く。そして、艶やかな微笑み。

「私の大切なお人形さん」

青い空をバックに、彼女はそう囁く。それから人差し指を薄い唇に当てて、少し考えるように沈黙する。けれど、すぐにその沈黙は破られた。

「私に堕ちて、私の者になりなさい」

そう言って、広げられた両腕。全てを包み込むような黒。肯定の言葉なんか必要なかった。私は彼女に魅せられる、吸い寄せられる。彼女と私は異質で同じ、だけれど違う。世界は黒く、塗り潰されてしまえば良い。身を寄せ、包まれ、幸せな窒息。ぐらりと浮くのはモノクロの身体。

そして、それから……世界は反転、そして暗転。さよなら、腐ったこの世界——貴女に堕ちる、その為に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6449v/>

堕ちる

2011年9月11日03時26分発行